

団塊のカタログ

ワシラ

トシタロー・クラフィティ

31年に飽きた。昭和32年に突入する。

点と線

これこそ日本の**推理小説**史上に残る大傑作である。かつては**探偵小説**と称されていた和風ミステリーも、戦後当用漢字表に**偵**の字がない為に**推理**が採用されたのだが、この松本清張の「点と線」以降それまでの探偵小説とはひと味違う**推理小説**が定着した。

その探偵小説、たとえば金田一耕助シリーズでおなじみの横溝正史ものは封建的な田舎の旧家を舞台に取り上げることが多く、その背景のブキミさで雰囲気盛りあげ、人間関係をやたら複雑にしてごまかしているだけなのである。(八つ墓村・極門島など)

良い例が「本陣殺人事件」で、花嫁が処女でないことを知ったからといって、そんなつまらない動機でその嫁さんを新婚初夜に殺すだろうか。(嫁さんいなくなるソ)

それだけでも不自然で無理があるが、ミステリーの命ともいべきトリックさえディスクン・カーの猿まねで、橋を水車に置き換えたに過ぎない。この金田一耕助の他にも名探偵がいる。由利先生だ。代表作に「蝶々殺人事件」があるが、語り手が犯人で、スポンサーを殺すプロットはアガサ・クリスティーの「アクロイド殺人事件」そのままだ。

ことほど左様に、海外ミステリーを読みあさった後で横溝正史の探偵小説に目を通すと腹が立つ。この設定はアレに似てるナ、でもまさかそのままじゃないだろうな、そんな不

吉な予感が大体的中するからだ。

特にヒドいのが遺作の「病院坂の首縊りの家」で、かつて自分が採用したトリックをそのまま再雇用する始末である。

そうはいつても横溝もののブキミさが他を圧倒しているのは事実で、芸術性より素人うけ＝採算を重視する角川映画(2度見る気はしない)によく取り上げられたのもわからなくはない。さて、松本清張である。

ド派手な横溝さんに比べればはるかに地味だが、トリックとプロットは実に独創性に富んでいるし、かつ背景描写も細やかである。

この「点と線」が良い例で、国鉄(JR)の時刻表を綿密に研究した結果に発見できた空白の4分間がトリックの根幹だが、その他にも青函連絡船・飛行機と、二重・三重に作者のワナが仕掛けられている。

アリバイ・トリックものにはクロフツの名作「樽」があるし、実際にヒントくらいは頂戴しているかもしれないが、だからといって作品の価値を落としてはいいない。

読んだ後に納得いくからだ。海外の名作といわれる本格推理小説と比べても決して負けていないのが、この「点と線」だ。

トリックの優秀さもそうだが、清張の一連の推理小説にはそれまでの日本版探偵小説にはなかった幾つかの特徴がある。

まず、名探偵が登場しない。

刑事が自分の足でコツコツと地道に調査して事件を解決するパターンが多く、関係者全員をシャンデリアのある大広間に集めて「犯人はおまえだ！」などのご指名することは間

違ってもない。そしてその刑事が日本各地を飛び回るのがお約束で、背景描写は純文学の趣さえある。これこそ社会派といわれる所以だが、我が国のミステリーを語る時、松本清張以前・以後と分類することが多いのもそれまでなかったからに他ならない。（松戸市議会でのワシみたい、かな）

作者がいかにもうまく読者をだまし、読者がいかに納得してだまされるかがミステリーの生命線だが、清張は読者を説得してくれる。

昭和27年に「或る『小倉日記』伝」で芥川賞（純文学部門の新人賞。大衆文学部門が直木賞）を受賞しているだけのことはある。

余談であるが、彼の作品はいずれも題名が凝っている。これは注目に値する。

「点と線」の「点」は駅のこと、「線」は線路（または東海道線などの線）を意味するのだが、そんなことは読み終えてからでなくてはわからない。「高校殺人事件」なんてのもあるが、ミステリーに付き物の「〇〇殺人事件」タイプは少なく、チラッと見ただけではわけのわからない哲学的な題名がやたら多い。「ゼロの焦点」「黄色い風土」「砂の器」「時間の習俗」「影の車」「黒い福音」「Dの複合」などで、読んだ後に「むむ、そういう意味だったのか」と納得できるのも、清張作品の楽しみ方の一つでもある。

桑田次郎と堀江卓

少年漫画から**戦争**ものと**少年探偵**ものが登場しなくなって久しい。後者の代表作の一つ「まぼろし探偵」がこの年から「少年画報」に連載を開始した。「8マン」「月光仮面」と並ぶ、**桑田次郎**の代表作でもある。

普段は学校に通っている良いコなのだが、女のコ（むろん美少女）が悪者に襲われてピンチになると、いつの間にか赤いベレー帽に

黄色いマフラー、黒いズボンと黒いシャツ、黒のアイ・マスクに身を固め、右手に自動拳銃を握りしめ、赤いオートバイにまたがって颯爽とやってくるのだ。それは良いとして、どこで着替え、それまで着ていた服はどうしたのか？ バイクの免許証は持っているのか、ピストルはどこから手に入れたのか？ などと考えた小学生はそう多くはない。

良くいえば純粋ともいえるが、まあ情報量が少なかつただけなのだ。

テレビを始めとして、情報伝達手段にこと欠かない今ではそうはイカの金ちゃん、リアリティーもしくはそれらしさが無視できなくなっている。家に帰っては小うるさいカーちゃんとしょっちゅう残業のとーちゃん、学校に行けば体罰教師、そんな厳しい現実の前にあつては、小学生が鉄人を操縦したりオートバイに乗ってピストルをブツ放すなんてことはあまりにも現実離れしすぎている。

それが原因かどうかはわからないが、少年漫画に小・中学生くらいの主人公がめつきり減り、高校生とか大人にまでレベルアップして現実性らしさも求められるようになった。

かつての「ドラゴンボール」が良い例で、連載当初はギャグ漫画特有の三等身だった主人公の**孫悟空**、子供のままではより強大な敵と戦えないからか、六等身にまで成長して、よりリアルに劇画的になってきた。

ここらへんが微妙なところで、孫悟空の存在そのものは不合理だが、大人の立場で活躍するのは確かに理にかなっている。

一方のまぼろし探偵、着替えを済ましてピストルを手に持ち、オートバイに乗って現れることは一応可能ではあるが、ガキの身分では出来っこないのは理解している。

かどうかはわからないが、小学生の読者が多いにも関わらず、少年漫画の世界から小・中学生らしきヒーローは消えつつある。

その古き良き時代の、おそらくは最後の少年探偵であろう「まぼろし探偵」だが、残念ながら同じ作者の「8マン」ほどの印象と感動は残っていない。当時の読者が懐かしがって読み返す分には良いかもしれないが、今の小・中・高生にウケるとは到底思えない。

同様のことは「月光仮面」や「少年ジェット」にもいえる。この桑田次郎さん、昭和40年には傷害とピストル不法所持でアゲられ、ホトボリがさめた後に、^{つばさ しんや}翼新也と改名して執筆活動を再開したところまでは記憶に残っている。お気に入りの作者の一人で、ていねいな画風の作者だっただけに惜しい。

^{ほりえ たく}堀江卓も、パッと出てパッと消えた。

ピストルが出てくる位だから舞台は幕末、似たような設定で時代劇ヒーローを使い分けて成功したのが「天馬天平」（少年画報）と「矢車剣之助」（少年）である。

天馬天兵はその名のごとく、馬に乗って現れる。悪者たちが岩陰から鉄砲をブツバナすが、馬上からフツと消えてしまう。

カウ馬がやってくると思う間もなく、馬の腹に逆さになってしがみついている天兵のピストルが火を噴き、悪者たちをやっつける。

それも二丁拳銃の乱れ撃ちだが、なぜか馬の脚には当たらない。早い話が活劇もので、市街地よりも山の中とか街道すじでの活躍が多かったこの天馬天兵に対し、矢車剣之助は江戸市中が主なテリトリーである。いつも矢ガスリの着物を着ていて、額には旗本退屈男のような三日月形の向こう傷がある。パツ。

……江戸市内で連続殺人事件が発生、死体はいずれもベツトリと濡れていて、かたわらには紙の折鶴が残っているが、凶器はどこにも見当たらない。被害者は「お、おりづるが飛んでくる」と言い残して死ぬ。

そんなバカなと思いつつも事件の真相に迫りつつある剣之助、とある雪の降る早朝に神

社を散歩していると、折鶴がツツと飛んできて剣之助を襲う。それは中に紙の折鶴が閉じ込めてある、先がとがった氷であった。

ナゾの凶器が氷、これはまた古いトリックであるが、こんな具合に日本版西部劇と探偵時代劇、いずれも江戸時代、それぞれの持ち味を良く活かしてどちらも面白かった。

あえていえばスリー・ファンキーズの手塚しげおでテレビ化された「矢車剣之助」か。

作者の堀江卓、ワシのお気に入りの作家の一人であるが、この2作以外は何も残っていないのはさびしい。でも覚えているぞ！

ロボット三等兵

「鉄腕アトム」や「鉄人28号」のような超高性能ロボットが主人公の空想科学漫画もあれば「ロボット三等兵」のようなギャグ漫画もある。名前すらないダメロボットが主人公で、作者は^{まえだに こけみつ}前谷惟光さん、後にも先にも代表作はこれっきやない。その後、他に競合作品は現れず、それゆえの名作といえるが、一方であまり知られてもいない。

それもそのはず、単行本でしか発刊されなかったからで、貸本屋の常連以外は目にする機会があまりなかったのだ。

この三等兵だが、最低の位は二等兵だから実際にはそんな位はない。最低のその下という意味で作者が命名したのだろう。顔・体・足・腕・指・鼻、すべてが金属製の丸い筒で出来ていて、いつもひどいガニマタで歩く。

（参考⇒お茶の水博士・こち亀の両津勘吉）

外観のイメージは「オズの魔法使い」に出てくるブリキ男、身分の設定は「のらくろ」といったところか。ギャグのネタは古典落語からチャッカリ拝借したりで、爆笑するほどの面白さもなかった。といいつつも、貸本屋においてあれば必ず借りてしまったもので、

こちらへんが「ロボット三等兵」の魅力なのだろう。同じタイプのギャグ漫画はその後登場してこないが「丸出だめ夫」のボロットとか「マジンガーZ」のボス・ボロットなどの脇役にその面影を見出だせなくもないが、主役として採用されたことは一切ない。

「スター・ウォーズ」のC3POを初めて見た時、このロボット三等兵を思い浮かべたのはワシだけであろうか？

「**ペスよおをふれ**」

少女漫画を語る資格はワシにはない。

それでも「マーガレット」連載の「ベルサイユのばら」（池田理代子。昭和47年）とか「なかよし」の「キャンディ・キャンディ」（作水木杏子・画いがらしゆみこ。50年）くらいなら知っている。といってもテレビを通してだが「ペスよおをふれ」（なかよし）とか「リボンの騎士」（りぼん）などはリアル・タイムの連載を立ち読みしている。

少年漫画で永遠に不滅の主題といえは、スポーツ・冒険・格闘ものだろうが、探偵・戦争ものは自然消滅（前述）してしまった。

少女漫画の場合でいえばまず恋愛もの、次に男のコのように大暴れできる宝塚もの（前述のリボンの騎士・ベルサイユのばら）だろうが、すっかり姿を消したのが「ママ母」ものである。漢字にすれば継母、2人目のかーちゃんのことだ。（イメージは姑）

本当のかーちゃん（美人がお約束）は病弱で、主人公が小さい頃に死んでしまう。

いろんなことがあって、とーちゃん（注・むろん美男子）は再婚するのだが、この継母がとーちゃんに気付かれないようにヒロイン（名前は覚えてない）をイジメるのだが、とーちゃんに心配かけたくないから黙って耐えている。すぐ言いつけてしまつては、2回で

完結してしまうからだ。これが継母ものの定番だが、この作品ではヒロインがくじけそうになると愛犬ペスが元気付けてくれる。

ペスは真っ白なスピッツで、いつもお口をポカーンと開けてシッポをふっている。

今でこそ日本種・西洋種問わず、ワン公の銘柄はゴマンとあるが、この頃は2種類しかないかった。スピッツとそれ以外だ。

真っ白いフワフワの毛におおわれた小柄なボディー、クルリと丸まっているシッポが可愛いスピッツ、この頃のダントツ人気だったから、少女漫画に登場してくるわけである。

この「ペスよおをふれ」は女の子だけでなく男の子にも結構知られていて、近所で飼われているスピッツは飼い主になんの断りもなく、勝手に**ペス**と命名したものである。（むろんシェパードは**リンチンチン**、コリーは**ラッシー**）お涙ちょうだい少女漫画の古典ともいべきこの作品、最終回まで読んだわけではないから結末は知らないが、ラスト近く父親が継母の意地悪に気が付き、ヒロインをギュッと抱きしめるシーンが絶対にある。

「苦労かけたな」「いいのよパパ」こんな会話の後、継母は追い出されるか、ヒロインの優しさに涙をボロボロ流し、改心して居すわるかで終わったのだろう。

この「継母」をバレーボールに置き換えれば「サインはV」か「アタックNo.1」だし、テニスなら「エースをねらえ」になる。

見方によっては継母ものは父親の愛を、スポ根ものはコーチ（美男）の愛を勝ち取るまでの女と女の闘いといっても良い。

つまり一種の恋愛ものであって、ペスとかバレー・ボールはドラマの狂言回しにすぎないのだ。そう考えると、ギャグものを除いたすべての少女漫画の行きつくところは恋愛ものなのかもしれない。

作者は**山田えいじ**さん。これつきり。